九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.358

2021(令和3)年 4月17日(土)発行

東日本大震災から10年⑦ 会員さんの震災関連"新刊"の紹介

若松丈太郎詩集『夷俘(いふ)の叛逆』

震災から10年の、3月11日に発行。若松丈太郎氏11冊目の詩集です。

"夷い"は「東方の未開の異民族」、"俘ふ"は「逃げないように囲われた捕虜」のこと。大和朝廷の時代から私たち白河以北の東北人は、上方から歴史的にさげすまれてきました。

若松氏は東北人の中から上方に"叛逆"してきた歴史や人物に光をあて、それを詩の作品として表現。阿豆流為あてるい、小林多喜二、鶴彬つるあきら、亀井文夫、舛倉隆、むのたけじなどの紹介作品も、東北人としての誇りを感じます。

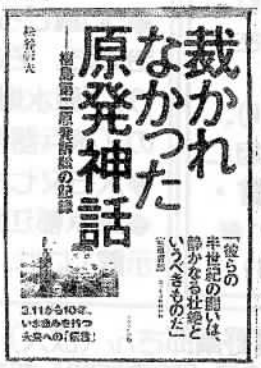
東京電力は原発立地の福島などを「植民地」と呼んできましたが、東北地方や東北人へのさげすみは現在も続いているのでしょうか。

『裁かれなかった原発神話』を読んで

事務局長　早坂吉彦

「申し訳ない。何とかこのような事故だけは起こさないように力を尽くしてきたが、力及ばず申し訳なかった。」

大震災で第一原発水素爆発が起きた直後、地元原告団の事務局長早川篤雄氏に寄せた、科学者安斎育郎氏の言葉として本の中で紹介されています。今から45年以上も前に、相双地区の住民が起こした「福島第二原発設置差し止め訴訟」に、科学的な論点・論拠を示して原告団を支援し続けている、数少ない学者の一人です。



会報前号でも取上げた、松谷彰夫著『裁かれなかった原発神話』<右>には単に裁判の経緯を記しただけでなく、当時誘致に走った相双各自治体や、それを後押しした国、県、それを喧伝した地元マスコミなどの働きがさまざまな資料をもとに丁寧に記録され、同時期を相双地区の教員だった私にも、当時の詳しい状況を伝えてくれます。

▲浪江町の東北電力「棚塩(たなしお)(浪江・小高)原発」建設予定地の丘陵。

震災後機会があり、津波の直撃で校舎内が破壊された浪江町の請戸小学校を見学したことがあります。学校の近くの請戸川に懸った少し小高くなった請戸橋から海が望め、南の遠方の崖の上に事故を起こした福島第一原発の建物、北の方には東北電力の「棚塩(浪江・小高)原発」建設予定地だった丘陵、その中央に観測塔と呼ばれた煙突様のものが一本高々と立っていました。

震災の時、大津波が福島第一原発に繰り返し襲いかかり、所内の交流全電源喪失と、それに続いて各炉内の冷却水注入停止を招き、ついには燃料棒露出によるメルトダウンが発生し、世界最悪の事故になりました。もしも、そこから北へわずか10kmしか離れていない「棚塩原発」が完成し稼働していたら、どんな結果になったか。福島第一原発と同様の甚大な水素爆発事故を引き起したにちがいありません。

静かな海辺の風景を見ながら、そんな恐ろしいことを想像せざるをえませんでした。

「棚塩原発」は1980年代には大部分の予定地が東北電力に売却されていて、着工はまさに目前の状況にありました。

それではなぜ当時、「棚塩原発」は計画通りに建設されなかったのか。それは予定地内の一人の地主、反対運動の先頭に立って東北電力に対峙した棚塩の舛倉隆さんと、どうしても売買契約を結ぶことができなかったからです。買い取り困難と判断した東北電力が、宮城の女川原発や青森の東通原発の建設に軸足を移していったことも大きな理由でしょうが、舛倉隆さんの存在が大きかったと思います。いわば「建てられなかった棚塩原発」が日本を破局から救ったと言っても過言ではないでしょう。・・・と、そんなことを思い出しながらこの本を読みました。

会員の皆様、ぜひこの本をお読みになられるようお薦めいたします。会員に限らず多くの方々の目にも触れることを切望しています。

○松谷彰夫著『裁かれなかった原発神話』かもがわ出版￥1800税、若松丈太郎詩集『夷俘の叛逆』コールサック社￥1500税は、南相馬市原町区三島町おおうち書店さん(TEL0244−22−4403)はじめ、全国の書店で販売中です。

No.358

東日本大震災から10年⑧ 楢葉町宝鏡寺に「伝言館」が開館

「南双葉九条の会」代表で、50年来福島第二原発の建設反対運動を行ってきた楢葉町宝鏡寺の住職で高校教員だった早川篤雄さんが、原発事故10年の3月11日、宝鏡寺境内に「伝言館」を開館しました。

「伝言館」は、原発事故の被害や教訓を住民の目線で伝える施設で、館長の早川さんが私費を投じて建設。パネル100点や、東京上野の東照宮で燃やし続けた広島の「原爆の火」を「非核の火」として移し、また<右>の「原発悔恨の碑」も注目です。

原発悔恨・伝言の碑

電力企業と国家の傲岸に
立ち向かって四十年 力及ばず
原発は本性を剥き出し
ふるさとの過去・現在・未来を奪った

人々に伝えたい
感性を研ぎ澄まし
知恵をふりしぼり
力を結び合わせて
不条理に立ち向かう勇気を！
科学と命への限りない愛の力で！

２０２１年３月１１日

早川篤雄
安斎育郎

▲<左>が、伝言館の開館に京都から駆け付けた安斎育郎立命館大学名誉教授。科学者としての良心から原発や核兵器に反対し続けました。<右>が、伝言館の早川篤雄館長さん。

○早川さんらの公害や原発反対の裁判闘争は、『裁かれなかった原発神話』にも記述されてます。

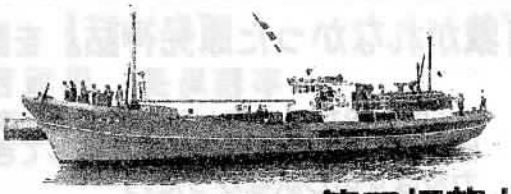
第五福龍丸の元乗組員 大石又七さん死去 87歳

「死の灰」が降って乗組員たちは

広島の時のように黒い雨ではなくて、白い雨が降ってきたんです。においもないし、味もない。水爆実験で白いサンゴ礁が吹き飛ばされてできた「死の灰」（放射性降下物）だった。乗組員たちはめまいや吐き気に襲われ、灰が付着した肌は水ぶくれとなり、10日ほど後には髪が抜け落ちた。

14歳で漁師になり、当時は20歳。結婚後授かった子どもは死産。肝臓がんも患った。だが、見舞金で政治決着済みとされ、何の補償もない。40～50代の働き盛りで死んでいく仲間たち。放射能の恐ろしさを政治家たちは隠している。

戦争好きな米国と一刻も早く手を切り、平和な世界を作る国々の仲介できる政府になってほしい。**（大石又七さんの証言・第五福龍丸展示館での講演・2021年原水禁日本協議会パンフレットより）**



23人の乗組員が被ばく第五福龍丸

◈1954年3月1日、米国が太平洋ビキニ環礁で強行した水爆実験で被曝したマグロ漁船の「第五福龍丸」。乗組員の大石又七さんは、はじめ偏見や中傷を恐れ、被曝者であることを隠し東京に移住します。

◈50歳ごろから講演でビキニ事件を訴え始めた。そこから反核の署名運動が起こり、「原水爆禁止世界大会」の開催、現在の「核兵器禁止条約」に発展します。

◈大石又七さんは3月7日、87歳で死去。

◈東京都江東区夢の島の「第五福龍丸展示館」には、船とともに関係資料を展示。

○1980年代、長く『朝日新聞』原町支局長だった清野粛郎さん（故人）は、第五福龍丸事件当時31歳で静岡県島田市通信局の記者でした。ところが3月16日『読売新聞』朝刊でこの事件をスクープされる苦い体験をお持ちでした。16日朝、船の甲板にあがり「死の灰」をつまんだり、無線長久保山愛吉さんとのエピソードなどをお話しています。（相双地区の被爆体験談集『私も証言する』に掲載）